短信
佐藤勢紀子/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 14(2022)44-47

# 非母語話者を対象とするくずし字教育の意義と課題
## ―BUNGO-bun project 第 4 回研究会報告―

佐藤勢紀子

## 要旨
非日本語母語話者への文語文教育に関する研究活動を展開している BUNGO-bun project の第 4 回研究会を 2022 年 2 月にオンラインで開催した。大学関係者を中心に世界各地から 60 名の参加があり、「くずし字教育の意義と課題」というテーマで 3 つの事例報告と討論が行われた。様々な教育現場でのくずし字教育の現状が明らかにされ、今後の課題として、より多くの学習の場の提供、写本解読を支援するツールの開発などが挙げられた。事後アンケートの回答からは、BUNGO-bun project 研究会が非母語話者に対する文語文教育の関係者同士の情報共有と交流の場として機能していることが窺えた。

## キーワード
非日本語母語話者、文語文教育、くずし字解読、日本研究

## 1. 研究会開催の経緯
### 1.1 BUNGO-bun project
文語文を学ぶ必要のある非日本語母語話者は、日本研究志望者を中心に世界各地に存在する。それに加えて、近年では、日本の文化や歴史への関心の高まり、古典を題材としたサブカルチャーの人気、中国の「高校日語専業八級考試」(大学日本語専攻 8 級試験）での出題などを背景に、文語文に興味を持つ非母語話者が増えつつある。

一方で、非母語話者に対する文語文教育の教育環境は、日本国外はもとより国内でも十分に整っているとは言い難い。文語文教育に携わる教師間の連繋も薄く、それぞれが手探りで教えているというのが一般的な状況である。

そのような現状をふまえて、報告者は、非母語話者を対象とする文語文教育の関係者のネットワークを形成し、ノウハウを共有しつつ教育の質を高めていくこと、さらには文語文教育研修システムを構築することを目的として、2020 年 8 月に BUNGO-bun project を立ち上げた。同プロジェクトでは、これまで、4 回の研究会、2 回のトーク・フォーラムを開催し、bungonet [(1)]を通じて関係者間の情報共有、交流の促進を図っている。

### 1.2 くずし字に関する研究会の企画
BUNGO-bun project では、その研究活動の柱となる研究会を年に 2 回のペースで開催している。毎回文語文教育に関する特定のテーマを掲げ、前半で複数の講師による報告を行い、後半で討論と情報交換を行っている。

2020 年 8 月の第 1 回研究会は、Covid-19 の流行によるオンライン授業の開始に応じて「オンライン化で生じた課題と可能性」というテーマで開催した（佐藤他 2021)。翌年 2 月の第 2 回研究会は、「オンライン教材を考える」というテーマで、報告者の開発教材

“BUNGO-bun GO!”[2]の紹介を兼ねて開催した（佐藤 2021）。第 2 回研究会までは文語文読解の基礎となる文語文法の教育に焦点を置いていたが、同年 8 月の第 3 回研究会では、近代以前の日本研究において重要でありながら学習機会の少ない漢文訓読を取り上げ、「漢文訓読教育の意義と課題」というテーマで報告と討論を行った（佐藤他 近刊）[3]。

そして、2022 年 2 月に開催した第 4 回研究会では、漢文訓読と同様に、近代以前の日本について研究しようする非母語話者にとって一つの障壁となっているくずし字を取り上げ、「くずし字教育の意義と課題」というテーマを立てた。本短信では、この第 4 回研究会の概要と参加者の反応を報告する。

## 2. 研究会の概要

### 2.1 開催日時と参加者

BUNGO-bun project 第 4 回研究会は、2022 年 2 月 19 日（土）22:00～24:00（日本時間）に Zoom によるオンラインで開催された。主催は BUNGO-bun project、共催は東京大学大学院人文社会系研究科・文学部日本語教室である。

開催に先立ち、bungonet、EAJS、ASAGAO などのメーリングリストを利用してプログラムと参加申し込みの方法について周知し、広く参加を呼びかけた。その結果、当日の参加者は 60 名に達した。その内訳を示せば、母語では日本語 43 名、日本語以外 17 名、居住地では日本国内 45 名、国外 15 名、身分では大学教員 37 名、大学非常勤教員 9 名、大学院生 5 名、大学生 3 名、その他 6 名であった[4]。

### 2.2 プログラム

第 4 回研究会のプログラムは以下のとおりである。

第 1 部　事例報告―くずし字教育の意義と課題

報告 1　日本美術史研究とくずし字教育―チューリッヒ大学における実践
Hans Thomsen（チューリッヒ大学）

報告 2　くずし字解読の基礎と応用―東北大学の事例から
荒武賢一朗（東北大学）

報告 3　くずし字学習支援アプリ KuLA のリリースとその後
飯倉洋一（大阪大学）

第 2 部　ディスカッション・情報交換

### 2.3 報告と討論の内容

ここでは、3 つの事例報告とそれに続く討論の内容をごく簡単に紹介する。

報告 1 は、日本美術史の研究者であるハンス・トムセン氏による実践報告であった。非母語話者の立場から、自身の学習体験をふまえて、美術史研究におけるくずし字解読の必要性が示され、鯰絵を資料としたユニークで体系的なくずし字指導の紹介が行われた。

報告 2 は、近世史を専門とする荒武賢一朗氏による授業「くずし字入門」の紹介であった。地域性の強い借金証文や村明細帳などの古文書を資料とし、オンラインで、また日本人学生と留学生の合同クラスでくずし字を指導する上での様々な工夫が示された。

報告 3 は、近世文学を専門とし、くずし字学習支援アプリ KuLA[5]を開発した飯倉洋一氏

による報告であった。アプリ開発の経緯とともに、AI を用いたくずし字解読ツールの出現などくずし字解読をめぐる近年の状況の変化が詳細に語られ、KuLA 利用の実態とその可能性、とりわけ KuLA を媒介とした「みんなで翻刻」の活動の広がりが紹介された。

第 2 部では、約 1 時間にわたり、報告者との質疑応答を中心にくずし字教育についての討論と情報交換を行った。報告者のほか、参加者 7 名からの発言があった。くずし字が「読める」ことと「わかる」ことの違い、くずし字学習の始め方、母語話者と非母語話者でのくずし字解読の能力差の有無、文語文法の習得度とくずし字解読力の関係、AI を用いたツールの可能性と限界、読む対象（版本か写本か）によるアプローチの違いなど、様々な論点についての議論が展開された。最後に、くずし字教育の今後の課題として、より多くの学習の場の提供、写本解読を支援するツールの開発などが挙げられた。

## 3. アンケートの結果

### 3.1 事後アンケートの実施

研究会終了直後に、参加者を対象にグーグルフォーム（無記名）もしくは E メールによるアンケートを実施した。質問は、1)母語（日本語／他）、2)身分、3)満足度、4)特に印象的だったこと、5)～7)各報告についてのコメント、8)今回の研究会や BUNGO-bun project についての感想・意見、の 8 項目とし[6]、1)～4)の回答を必須とした。2 月 26 日の提出期限までに 40 名（母語話者 31 名、非母語話者 9 名）からの回答があった。

### 3.2 アンケートの回答

まず、前項の質問 3)でたずねた研究会への満足度については、「満足できなかった」(＝1)から「とても満足した」(＝10)までの中で「10」を選んだ回答者がグーグルフォームでの回答者 38 名[7]のうち 21 名（55.3%）で過半数を占めた。「8」～「10」を選んだ回答者は 36 名（94.8%）、残り 2 名の回答者も「6」以上を選択していた。アンケート回答者の範囲内での結果ではあるが、全体に満足度が高かったことがわかる。

次に、質問 4)への回答から、今回の研究会で特に印象的だったことについてのコメントの一端を紹介する。実践報告については、7 名から様々な取り組み、工夫を知ることができたという趣旨のコメントがあり、印象に残った特定の報告を挙げる回答者も 6 名いた。討論については、「いい質問がたくさんあって勉強に」なった、「(報告者だけでなく）他の先生方、大学院生の方の生の声を」聞けたのが貴重な経験だったという感想が示された。討論の論点の中では、くずし字が「読める」ことと「わかる」ことの違いについての議論が印象的だったというコメントが 4 名から寄せられた。他に、都々逸の利用、日本と中国でのくずし字の違いなど、討論の中で出てきた情報に反応した回答も見られた。

最後に、質問4)、8)への回答から、BUNGO-bun project 研究会の開催についての感想・意見を紹介する[8]。「国や分野を超えてくずし字教育の現状と課題について交流」できた、「先生方がくずし字の勉強についていろいろなアドバイスをくれた」、「一人では思い至ることのできない示唆」を受けた、「世界が広がったような感覚」などのコメントがあり、この研究会がプロジェクトの目的に即した関係者の繋がりと情報共有の場になっていることが窺えた。また、会の運営については、質疑の時間が比較的多く確保されていたという指摘が2名からあり、討論の内容に言及するコメントも多かったことから、以前指摘

された討論の時間が短いという問題（佐藤2021、p.60）は改善されたと言える。しかし、一方で、報告の時間が短かったとする意見もあり、時間配分の難しさを感じさせられた。

## 4. まとめ

以上、「くずし字教育の意義と課題」というテーマで開催した BUNGO-bun project 第 4 回研究会について、その概要と参加者の反応を報告した。今回の研究会では、討論に多くの時間をとり、テーマについて様々な見地から議論することで、より正確に現状を把握し、教育上の課題を明確化することができた。また、研究会が文語文教育関係者同士の連繋をもたらしているという感触も得られた。非母語話者に対する文語文教育については、他にも、効果的な教材の選び方、授業の進め方、文語文リテラシーを育成する研修のあり方など、検討を要する事項が多い。今後の研究会での検討課題としたい。

（佐藤勢紀子さとうせきこ・東北大学・sekiko.sato.e8@tohoku.ac.jp）

## 付記

本短信で報告した研究会は、科学研究費助成事業基盤研究(C)20K00720「非母語話者の文語文学習支援のためのシラバス・教授法開発および研修システムの構築」（2020 年度～2022 年度、研究代表者：佐藤勢紀子）による助成を受けて開催した。

## 注

1. 非母語話者に対する文語文教育の関係者のメーリングリスト。2022 年 2 月末時点の登録者は 87 名。このほか第 4 回研究会に参加した 14 名が新規登録を希望している。
2. https://bungobungo.jp/
3. ただし、佐藤他（近刊）はオンラインでの研究会運営に重点を置いた報告である。
4. なお、国別では、日本、中国、スイス、ドイツ、イタリア、スロベニア、イギリス、アメリカ合衆国の 8 カ国からの参加があった。また、大学関係者以外では、高校教員、学芸員、図書館員などの参加があった。
5. https://kula.honkoku.org/
6. その他、bungonet への登録に関する質問も設けた。
7. E メールによる 2 名の回答は記名であるため、3)の満足度のデータからは外した。
8. 質問 5)～7)への回答についての報告は、紙幅の関係で割愛する。

## 参考文献

佐藤勢紀子・虫明美喜・小野桂子・金山泰子（2021）「非母語話者の文語文学習のためのオンライン授業―BUNGO-bun project 第 1 回研究会報告―」『東北大学言語・文化教育センター年報』6, 15-24.

佐藤勢紀子（2021）「非母語話者の文語文学習を支援するオンライン教材―BUNGO-bun project 第 2 回研究会報告―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』13, 58-61.

佐藤勢紀子・虫明美喜（近刊）「東北大学 BUNGO-bun project「BUNGO-bun project 第 3 回研究会」(2021 年 8 月 21 日)運営報告」, 茂木謙之介・大嶋えり子・小泉勇人（編）『コロナとアカデミア』雷音学術出版, 84-86.